OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	レオナルト・ネルゾンのソクラテス的方法
Author(s)	寺田, 俊郎
Citation	臨床哲学. 2001, 3, p. 61-72
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/8586
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

レオナルト・ネルゾンのソクラテス的方法

寺 田 俊 郎

現在ヨーロッパを中心に多様な展開を見せている「ソクラティク・ダイアローグ Socratic Dialogue/Sokratisches Gespraech」の原形は、20 世紀初頭のドイツの哲学者、レオナルト・ネルゾン (Leonard Nelson 1882-1927) の哲学教育法にある。ゲッティンゲン大学で哲学の員外教授を務めていたネルゾンは、哲学の教育に独自の方法を用い、それを「ソクラテス的方法 (Sokratische Methode)」と呼んでいた。1922 年、ネルゾンはゲッティンゲン教育協会のためにソクラテス的方法に関する講演を行って、自らの方法を一般に紹介した。この講演はネルゾン全集の第 1 巻に収められており、同時に、ドイツにおいてソクラティク・ダイアローグを推進している「哲学・政治アカデミー (PPA)」が、ソクラティク・ダイアローグの古典として、抜き刷りのパンフレットとして出版している。[1]

ネルゾンは、日本においてはもちろん、欧米においてもほとんど知られていない哲学者である。ネルゾンが若くして死んだこと、ネルゾンのグループがナチス・ドイツによって排斥されたことなど、いろいろな理由が挙げられるだろうが、この講演の英語版の緒言にあるように、ネルゾンが当時のドイツの哲学界において異端だったことが大きいであろう。ネルゾンは、カントの哲学を心理学的に解釈したフリース (Jakob Friedrich Fries)の哲学を出発点としているが、フリースの心理主義的なカント解釈がカントの哲学の研究史において重要な地位を占めたことはない。そのフリースから直接的な影響を受けたネルゾンの哲学は、新カント派の哲学が成熟期を迎え現象学が勃興しつつあった頃のドイツにおいて、影の薄い存在だったのである。[2] また、この講演からわかるように、ネルゾンは硬派の理性主義者であり、その哲学の根底には「理性の自己信頼 (Selbstvertrauen der Vernunft)」という揺るぎない信念がある。「理性の自己信頼」と聞いただけで読む気を失う人も今では多いであろうし、そうでない人もこの講演に表明されているネルゾンの哲学観にはさまざまな疑問をもつことであろう。しか

も、この講演の内容と意義とをネルゾンの哲学の全体に照らして解説する用意は、残念ながら今の私にはない。にもかかわらず、この講演を敢えて取り上げるのは、まず、この講演が、現在臨床哲学が注目しているソクラティク・ダイアローグの可能性を吟味するために欠かせない資料だからである。この講演を読めば、現在のソクラティク・ダイアローグの実践家たちが、さまざまなニュアンスの違いはあれ、その精神を等しくネルゾンから受け継いでいることは明らかである。さらに、この講演は、哲学の教育はもちろんのこと、広く教育というものの本質に関わる興味深い洞察を示しており、その点でもたいへん示唆的である。

以下では、この講演の内容に則して、できるだけ私の見解は交えずに、ソクラティク・ダイアローグの原点であるネルゾンの考えを紹介していきたい。[3]

1

ネルゾンは、哲学を教える方法としてのソクラテス的方法について講議する自分の立場を、バイオリン演奏のしかたを尋ねられて自分の技を実演してみせることはできるが、それを抽象的な語で説明することができないバイオリニストに準えている。ソクラテスの方法は、哲学ではなく、哲学することを教える方法であり、哲学者について教えるのではなく、生徒を哲学者にする方法である。それゆえ、ソクラテス的方法は講議によって教えることはできず、教師が生徒と共に哲学的な問題をとりあげ、ソクラテス的方法に従ってそれに取り組むことによってのみ、教えることができる。にもかかわらず、ネルゾンが敢えてソクラテス的方法について講義するのは、人々の関心をこの教育の方法に向け、人々がこの教育を正しく理解するよう促すという、限定された目的のためである。

目的は限定されているとはいえ、ソクラテス的方法を説くネルゾンはなかなか雄弁である。ネルゾンは、ソクラテス的方法に対する愛着を次のように語る。ソクラテス的方法は、「哲学の継子として、いじめられないがしろにされ、もっと思わせぶりで扱いやすい独断的方法という人気者の姉の陰に隠れて、ひっそりと生き残ってきた。」ネルゾンは、この姉妹のうち年下の方に個人的な好みをもっており、「彼女と過ごす時間が長ければ長いほど、私は彼女の魅力の虜になる」と告白する。それは彼女がもっている内面的な価値のためである。彼女の名誉ある地位を回復することは、ネルゾンにとって「騎士道の事柄」なのである。

ある方法の価値はそれが目的を達成できるかどうかで決まる。数学や数学を基礎と

する自然科学は、そのような方法をもっている。数学には「漸進的方法 (progressive Methode)」があり、自然科学には「帰納的方法 (induktive Methode)」がある。これらの学においては、方法は疑いないものとして承認されており、方法に対する異論が立てられるとすれば、それはもっぱらその方法をさらに確実に、豊穣にするためである。

しかし、哲学においては事情がまったく異なる。哲学は、まだ誰もが自分自身で法則や規則を立てる権利を主張し、方法論は暫定的で、ただ歴史的な評価にのみ左右されると見なされているような学なのである。ヴィンデルバントもいうように、自分の学には固有の方法があると主張する哲学者の間ですら、「哲学的方法」に関する意見の一致は少しも見られないのである。このような無政府状態のなかでは、ある哲学の理論が軽蔑されているからといって、その理論に学的な価値がないということにはならない。有効な判断の一般的な基準が存在しないのに、ある哲学の理論に価値があるかどうか判断することはできないのである。このような混乱は、結果として得られる哲学的真理が多様であるために生じたのではない。むしろ、偉大な哲学的真理は、はじめから偉大な思索者たちの共有財産であり、それが哲学の共通の出発点である。しかし、哲学的真理を恣意的ではない明確な規則に従って吟味すること、明確かつ正確に方法論的課題を定式化すること、これらの課題がまだ果たされていないのである。

このような手探りの状態から哲学を救い出し、学の確かな道に乗せる試みを敢行した人々として、ネルゾンはソクラテスとカントを挙げる。二人の試みの真の意義は、彼らが自ら強調した通りである。よく知られているように、ソクラテスは思想の体系を築かず、繰り返し自分が無知であることを告白し、また、あらゆる断定的な主張に対してそれが真である根拠を探し求めるよう促した。『ソクラテスの弁明』が示すように、ソクラテスは教師然として新しい真理を伝えることはせず、仲間の市民たちに問い続け、真理の発見に到る可能性のある道を指摘するのみだった。ソクラテスの倫理的教説は、徳は教えることができる、すなわち倫理は学である、という命題に基づいているが、彼はこの学を発展させることはなかった。どうすれば徳についての知を獲得することができるか、という問いにこだわったからである。彼は、実りのある結果が出ないことを厭わず、自分の方法が健全であることをいささかも疑うことなく、その問いこそが正しい道だと確信していた。

ソクラテスの方法はプラトンによって継承され護持されたわけだが、そのプラトンが伝えるソクラテス像の限界をネルゾンは次のように指摘する。プラトンは、ソクラテスと同じように真理への思いに導かれて、自分自身の発見までもソクラテスの口に語らせた。しかも、プラトンはこれらの発見に、むらのある、冗長な、脱線しがちな

ソクラテス風の対話を纏わせたのである。そうすることによって、プラトンは未発掘の宝物を保全し、その豊かな恵みを開拓する可能性を後世に残した。しかし、二千年後の今日、ソクラテスに関する見解はかつてないほど混迷している。ソクラテスは正真正銘の哲学者であったという見解があるかと思えば、ソクラテスの実態は哲学者という称号からほど遠いという言明があるというありさまである。ネルゾンは、このような分裂の由来をソクラテスの哲学に対する不適切な批評に求めている。ソクラテスの方法に関する批評は、その通俗性を誉めるか、その価値をもっぱらソクラテス個人の人格に帰するかのいずれかである。ソクラテスのないソクラテス的方法は無意味だというわけである。では、そうした混迷したソクラテス像から、ネルゾンはどのようにしてソクラテス的方法を取り出すのだろうか。その点についてネルゾンは詳しく述べていない。

ネルゾンは、カントの批判哲学をソクラテス―プラトン哲学の復興として評価する。この点が理解されなかったのは、カントの批判哲学が方法論として読まれず、その体系だけが論争の対象とされたからである。そして、カントの批判哲学をめぐる論争から独断論が生まれ、カントの批判哲学には空想に満ちた哲学史によって不自然な地位が与えられた。ネルゾンは名指してはいないが、ドイツ観念論のことであろう。カントが提示した体系を真に理解するためには、カントがたどった道を自らたどってみるしかない。それをなし得たフリースのような数少ない例外者たちは、抗いがたい「時代精神」によって押し流されてしまったのである。

2

では、哲学の方法とは何か。ネルゾンは、数学および自然科学と対比させることによって、哲学の方法を明らかにすることを試みる。数学の原理は直観的に明晰で明証的あり、意識によって容易に把握される。自然科学の原理は、数学と違って、帰納によって発見される。帰納は事実の観察から始まり、その事実から実験によって偶然的な要素を消去する。同時に、時間・空間のあらゆる事象は数学的処理の対象になる。こうして得られた理論的普遍的命題は、経験的命題である限り、それを肯定する経験と否定する経験とによって吟味され、それによって自然科学は学の水準に達した。(もちろん、帰納の形而上学的前提が問題になることはあるが。) それに対して、哲学の原理は自明ではなく、それどころか曖昧で、不確実で、論争のもとである。哲学の命題は、具体的な事例を無視し経験から引き離して抽象的な定式にしようとするや否や、人為

的な方法の光で照らさないかぎり形而上学の闇に迷い込むのである。

こうして、ネルゾン独自の哲学の方法論が展開される。哲学の方法は、単なる論理規則以上のものだが、哲学的知識を創造するわけではなく、原理への遡求が暗闇のなかの飛躍にならないように、安全を確保することを本領とする。しかし、個々具体的なものに関する判断以外に明らかなものがないのに、どうやってそのための指針を見い出すことができるだろうか。科学や日常生活の経験的判断を超えて行くとき、どうやって方向を決めることができるだろうか。具体的な判断を批判的に吟味してみればよい。その種の判断は、観察によって与えられる特定の所与の他に、判断の形式そのものに潜むある認識を含んでいるのである。この認識こそ理性のうちにある哲学的原理と個々具体的な判断とを媒介するものである。ネルゾンの挙げている例を見よう。実体の概念をめぐる哲学的議論においては、実体の概念を疑う懐疑論者が勝利をおさめがちである。が、その懐疑論者が議論を終えて帰ろうとする時、自分のコートがなくなっていることに気づいて、それを探すとすれば、その行為を促す判断の根底には実体は存続するという形而上学的原理が潜んでいるのである。

このようにして、経験的判断の可能性の制約を究明していくと、その判断の基礎となるさらに普遍的な命題に到達する。その判断が依拠する前提に遡るわけである。こうして、帰結から根拠へ遡求することによって、個々の判断にまつわる偶然的な事実を捨象し、具体的な事例に関する判断の不分明な前提を明らかにすることができる。ネルゾンは、この方法を「遡求的抽象 (regressive Abstraktion)」と名づける。ネルゾンによれば、これはカントの「超越論的演繹 (transzendentale Deduktion)」の方法と同じ構造をもっている。この方法は哲学的原理を露にするのに役立つのであり、事実や法則の新しい知識を生み出すのではない。「それは、ただ、根源的な所有物として我々の理性のなかにあり、あらゆる個別判断のなかにぼんやりと察せられるものを、反省を通じて明晰な概念にするだけである。」かくして、哲学とは「思惟のみを通じて明らかになる理性的真理の総体」であり、哲学することとは「ただこれらの抽象的な理性的真理を我々の知性を使って分析し、普遍的判断の形で表現すること」なのである。

すでに明らかであるように、ネルゾンのソクラテス的方法の背景には一種の想起説がある。ただし、後に見るように、それはプラトンの神秘主義から解放された想起説である。ネルゾンがカントの哲学をソクラテス―プラトン哲学の復興として捉えたのも、カントの哲学にそのような想起説を読みとってからに他ならない。ネルゾンのいう哲学的認識とは、すでに理性のなかにあり、個々の判断においてはたらいている普遍的な知であり、それを明らかにする方法が遡求的抽象なのである。遡求的抽象は、自

然科学における帰納の方法と同じように、特殊なものから普遍的なものへと進むが、判断の前提となっている認識へと遡ることによって偶然的なものを消去していくという点で、帰納とは異なる。

さて、哲学的認識の本性がこのようなものだとすれば、哲学教育はどのようなものになるだろうか。ネルゾンによれば、哲学的真理は、歴史的事実や幾何学的定理とは違って、通常の授業によっては伝えられない。ネルゾンは、特に数学教育と対比することによって、哲学教育の性格を明らかにしようとする。実は、この対比はこの講演の最後にソクラテス的アイロニーによって思わぬ展開を遂げるのだが、さしあたりネルゾンは次のように言う。数学的真理は注意を向けさえすれば明らかになり、それを学生に伝えることによってその明晰さが失われることはないのに対して、哲学的真理を学生に伝えようとすると、他人があれやこれやを哲学的真理と見なしたという歴史的事実になってしまう。これはせいぜい哲学の歴史の教育であって、哲学の教育ではない。「まじめに哲学的洞察を伝えようとする教師は、ただ哲学する技法 (Kunst des Philosophierens) を教えようとすることができるのみである。」「それゆえ、そもそも哲学の授業などというものがあるとすれば、それは自分で考えるという形の、もっと精確にいえば、抽象の技法を自立的に実践するという形の授業でしかあり得ない。」こうして、哲学の教育の方法としてのソクラテス的方法とは、哲学ではなく哲学する技法を教える方法だという、この講演の冒頭の言葉の意味が明らかになる。

しかし、この方法を「ソクラテス的」と呼ぶのは適切だろうか。ソクラテスの対話には現にいろいろな欠陥があったではないか。それは確かだが、次のような点で、やはりソクラテス的方法だけが哲学の方法であると言える。ソクラテスは、まず、実際の対話を通じて、対話相手が自分の無知を自ら悟り、自分の信念の根底にある独断的な前提に自ら気づくよう促した。これは、いわば精神を自由へと強制する技法であり、講義や文書によっては決してなされ得ず、ただ実際の対話によってのみなされ得ることである。さらに、ソクラテスは、対話相手が自分の無知を悟ると、そこからいきなり形而上学的な問題へ進むのではなく、具体的な事柄に注意を向けるよう促し、そこから普遍的真理へと遡るよう導いた。これをアリストテレスは帰納と捉え、その点でソクラテスを評価したが、正しくはこれは帰納ではなく抽象である。確かに、ソクラテス自身この方法に失敗した。さまざまな方法論的な誤りが混入したからである。その最たるものは、概念をその定義を分析することによって明らかにしようとする方法である。そして、この誤りは後にプラトンのイデア論として結実することになる。これらの誤りを後知恵によって批判するのは簡単であるが、それにこだわるのは無意味

であろう。ソクラテスがその実践を通じて勇気をもって着手したことをこそ評価すべきなのである。「ソクラテスは、哲学的真理を認識する人間の精神の力に対する信頼に支えられて、この信頼を、思いつきや外からの教えによっては我々は哲学的真理に到達することはなく、ただ計画的で不断の首尾一貫した思惟によってのみ闇から光へ到ることができるという確信と結びつけた、最初の人である。ここに彼の哲学的な偉大さがある。彼の教育的な偉大さは次のことに存する。彼は、これもまた最初の人として、この、自分で考えるという道に弟子を赴かせ、ただ考えを交わすことによってのみ、自己欺瞞を防ぐための指導を行ったのである。」

そして、ネルゾンは、カントとフリースの哲学を、ソクラテスの想起説をプラトンの神秘主義から解放する試みとして評価するのである。彼らの提示した「演繹」によって、ソクラテスの遡求的抽象の方法は学として確立したのである。カントとフリースの批判哲学のおかげで哲学は方法論の面で発展し、あとはソクラテス的方法の実践を、特に哲学教育において促進するだけである。

しかし、ソクラテス的方法による教育はパラドックスをはらんでいるように思われる。ソクラテス的方法の目的は自立して考えることを学ぶことであり、それが可能になるのは、ただ生徒が最初から自分自身で考えることを通じてでしかないとすれば、それをどうして教師が教えることができるだろうか。これは、哲学の教育のみならず、そもそも教育というものがはらむパラドックスでもある。教育の目的が、外的影響によって規定されることなく自己規定することを学ぶことだとすれば、教育は、教師が外的影響を行使することによって、生徒が外的影響に左右されないようにする、という矛盾をはらむことになるのである。このパラドックスを、ネルゾンは外的影響の二つの意味を区別することによって解決しようとする。外的影響には、外的刺激一般と外的規定根拠との二つの意味がある。教育が後者であるとすれば、それは他人の考えを受容することを強制することでしかないであろう。しかし、人間の精神は、外的刺激によって覚醒されて、自身の内に哲学的真理を見い出すのであり、前者の意味での外的影響と自ら哲学的真理へと遡求することとは矛盾しないのである。哲学教育は、哲学的理解を阻む外的影響を弱め、哲学的理解を促す外的影響を強めるのである。

3

以上のようにソクラテス的方法の課題とその解決の見通しを述べ、ネルゾンは自らソクラテス的方法を実践した経験も交えながら、その具体的な手続の説明に進んでいく。

ソクラテス的方法における教師の役割は、はじめから独力で進むことを教え、生徒に責任をもたせることである。そのため、教師は哲学的な問いを問わないし、哲学的な問いを問われても答えない。すると、よく教師に次のような問いが向けられる。「あなたがしようとしていることがわかりません。」これには、「別に何もしようとはしていませんよ。」と答える。ただし、学生の間で問いと答えのやり取りが続くようにするために、「誰か質問はありませんか。」などと問うことはある。不適切な問いが出たり、あるいは、問いがまったくでなかったらどうするか。これは、生徒を自発的な活動に着手させるときにつきまとう困難だが、教師はアリアドネの糸のようにヒントを与えたいという誘惑に負けてはならない。そもそも学生が哲学に取り組もうとしているからには、すでに何らかの問いをもっているはずである。さもなければ、哲学することなどはじめからできない。問いが出るまで待つべきである。もちろん、時間を省くために、あらかじめ問いを考えておくように指示することはできる。だが、時間を省くために、生徒が自分で問いを定式化する努力を省いてはならない。教師は問いの良し悪しを指摘したりはしないが、すべての不適切な問いをそのまま議論の俎上にのせるわけではなく、問いを吟味するよう促す。声の小さな問い、矛盾した問いは無視する。優れた問いを誉めて議論を促したり、不適切な問いを「誰か今の発言が理解できる人はいますか。」と問うことによって退けることもある。また、混乱した問いや曖昧な問いは「それはどういう意味ですか。」と問い返して、問いの意味を明確にさせる。そのうち、グループはおのずから明確で単純な問いを選ぶようになる。哲学において明確な問いを立てることは必要な努力である。倫理学のゼミナールが一学期かけて、最初の問い（「道徳的に行為するのは愚かなことではないか。」）が不適切だったという合意に到達したことがあったのは驚くべきことではない。

学生の答えを教師が論評することはないが、学的な話し方の必要条件を満たすことを教えるために、わけのわからない答えを無視することはある。また、対話が続くように問いを発することがある。「この答えは問いとどう関係するのですか。」「どこに重点があるのですか。」「話についていっていますか。」「さっき自分が言ったことの意味がまだわかりますか。」「今論じているのはどんな問いですか。」

このようにして進んでいくうち、議論は錯綜し、最後にはみんなどこに向かっているのかわからなくなる。ソクラテス的方法のグループの誰もが知っている例の困惑が訪れるのである。学生は、考えることによって何かを明らかにする能力を奪われたかのように感じる。教師はそれを許容すべきだろうか。ネルゾンはプラトンの対話編『メノン』の有名な一節を引き合いに出す。メノンは、ソクラテスは触れるものを麻痺さ

せる「シビレエイ」のようだと言い、「ソクラテス、いったいあなたは、それが何であるかがぜんぜんあなたにわかっていないとしたら、どうやってそれを探究なさるおつもりですか？」[4]と問う。ソクラテスの有名な答えはこうである。「いやしくも以前にも知っていたところのものである以上、魂がそれらの物を思い起こすことができるのは、何も不思議なことではない。」我々はみな、この一節がプラトンのイデア論を反映するものであり、史的ソクラテスの言ったことではないことを知っているが、そこには理性の自己信頼、理性の自足的な力への崇敬というソクラテスの精神が表明されている。学生を困惑と落胆という試練に遭わせる勇気のない教師は、学生から探究に必要な忍耐を奪うだけでなく、学生が自分の能力を直視し、自分に対して誠実であることを妨げることになるのである。

さて、ソクラテス的方法に対しては、次のような批判がある。まず、問われているのはどんな問いか、話し手が言おうとしていることは何か、などを確かめるというような基本的なことに時間をかけ過ぎる、というものである。しかし、この点こそがソクラテス的方法の長所である。つまり、教育の独断的方法の弊害を暴くのである。また、事例や事実によって思惟の方向を定めるのは非哲学的だという批判がある。しかし、思惟の落とし穴を避けることができるのは、それを具体的な事例に適用することによってのみである。論理学を学んだところで論理的に考えることができるようになるわけではなく、ただ判断力を実際にはたらかせることによってのみそうすることができる。教師が元の問いに戻ることを要求し、生徒がたどってきた道を一歩一歩見直し、間違いの原因を精査することによって、いわば自分自身の論理学をつくらない限り、論理的に考えることができるようにはならない。哲学も同じである。遡求的抽象の道を自ら歩むことによって、問題を一歩一歩解決することによってのみ哲学を学ぶことができる。この歩みは経験に足場をもっているのである。哲学の専門家と呼ばれる人々は、知性を具体的に使うことを軽蔑し、例をあげろと言われると、大海原だとか砂漠だとか日常からかけ離れた例を出して空想の世界を彷う、こう言ってネルゾンは哲学の専門家を揶揄している。

さらに次のような批判もある。この方法によっては、問題を深く掘り下げることができないのではないか。というのも、ソクラテス的方法の意義は、他者とともに考えることによって一人で反省するよりも容易に真理に到達できるところにあるが、問いと答えが沸騰する議論を実際に経験すると、哲学的反省に必要な落ち着きというものが欠けているという印象を受ける人も多いからである。確かに、ソクラテス的問答において感情的要素が力をもつことがあるのは避けられない。それは教師の努力によっ

てかなりの程度防ぐことができるが、参加者の協力がなければ無理である。このような困難は避け難い。それを克服するには意志の力が必要である。「みなさんには奇妙に聞こえるかも知れませんが――事実そうなのです――人が哲学者になるのは、精神の才によるのではなく、意志の強さによるのです。」感情的な困難を克服することだけではない。問いを手放さず考え抜くしぶとさは、固い意志によってのみ可能である。教師は学生が強い意志をもつよう要求することを放棄してはならない。さもなければ、哲学を教えることはできない。

グループで考えを吟味するに必要な最低限の条件は、次の二つである。一つは、考えを伝達すること。知識や他の人の考えではなく、自分自身の考えを伝達することである。確かな「感じ」をもっているが伝えられないという言い訳は通用しない。そのような感じは真理への第一歩でもあり得るが、先入見の守護者でもあり得るのだから。もう一つは、明確な言語を使用すること。はっきり聞き取ることができ、普通に理解できる発話が必要であり、専門用語は不要であるばかりか有害である。この要求を課することによって、議論することに熟練した人々が与えた恣意的な定義や、その定義から巧妙に導き出された疑似証明を批判することができる。そして、閃きではなく方法に従って一歩一歩隠れた前提に遡っていくことができる。もちろん、常識だけで学的に哲学するための条件が満たされるというわけではなく、哲学の探究には抽象の技法の厳格な修練が必要であるのだが。

さて、ソクラテス的方法に向けられるもう一つの批判は、ソクラテス的方法が広まらなかったのは、その方法自体の限界によるのではないか、というものである。ソクラテス-プラトンの想起説、つまり理性の自己信頼を復興した正真正銘のソクラテス主義者であるフリースですら、ソクラテス的方法は知性の自己吟味を完遂するには不十分だと考えていたのである。フリースは、ソクラテス的方法が初心者を導くには有効であり、あらゆる哲学教育はそこから出発すべきだが、高次の哲学的真理に関する限り、教師が抽象に適した言語を採用し、それを教えなければならない。しかし、ネルゾンによれば、妥当で、明確で、十分に根拠づけられた理論を学生に提示するのは不毛である。では、なぜフリースはソクラテス的方法を低く評価したのか。幾つか理由が考えられるが、最大のものは、フリースの才能が際立って優れていたために、才能の劣るものと密に接することができなかったことだとネルゾンは言う。つまり、フリースも独断論の危険と無縁ではなかったのである。

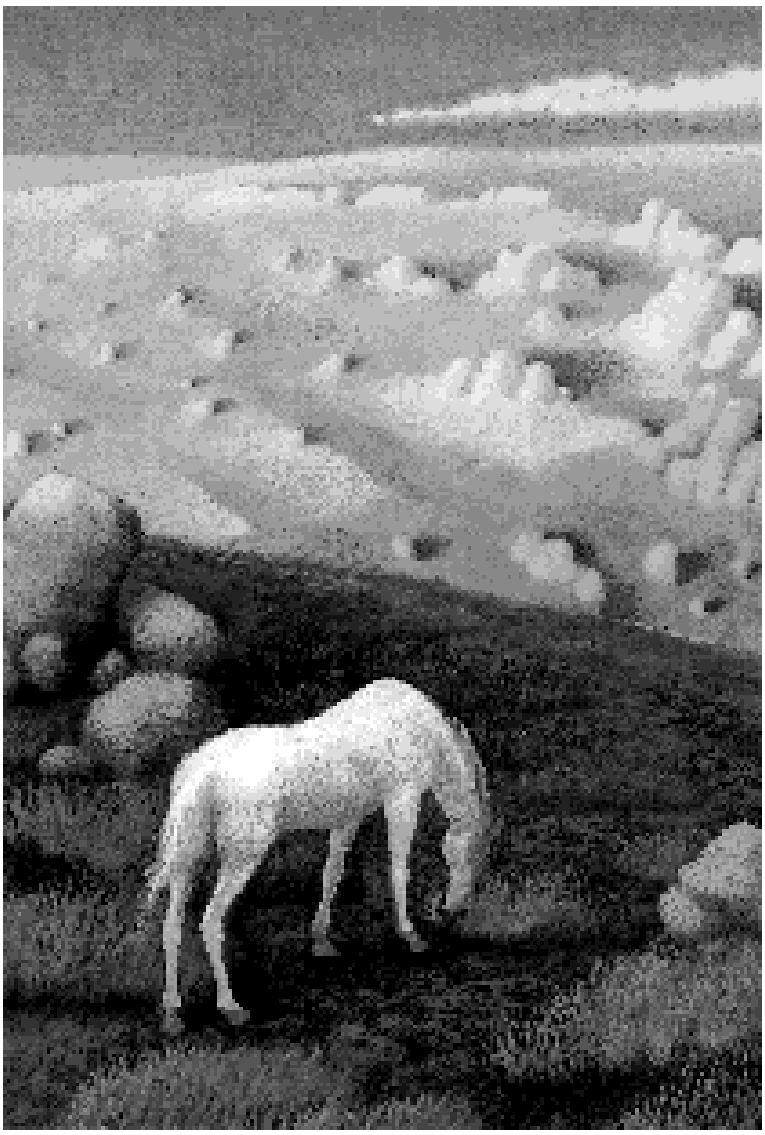
ソクラテス的方法に上述のような限界はないことを、ネルゾンはまず自らの経験と学の歴史によって裏づける。たとえば、ソクラテス的方法のゼミナールで、法の哲学

に取り組み、法の体系の構築にまで進んだことがあるという。また、たとえば、中等学校や大学の勤勉で才能に恵まれた学生ですら、厳しく試験してみれば、数学の初歩すらあやふやであり、無知をさらけだすことは、数学教師の間では公然の秘密である。すでに見たように、数学は直観的に真であるのに、その数学ですらこの有り様である。こうして、ネルゾンは、ソクラテス風のアイロニーでもって、数学ですらソクラテス的方法によらなければ本当は教えることができないことを示そうとする。数学教育が不十分なのは、教師の資質のせいばかりでなく、もともと独断的方法では完全な理解をもたらすことはできないことによるのである。微分積分が恰好の例を与えてくれる。ニュートンの微分積分の定式は、後のコーシー(Cauchy)らの定式をまつまでもなく明確かつ精確であり、誤解に対する注意書きすら備えている。にもかかわらず、それが理解されるまでには時間がかかったし、現代においてすら論争があるのである。このような、一つの学の客観的明晰性および体系的完全性と、それが理解される教育的確実性との乖離は、印象的な警告である。結果を受容するだけでなく、結果を理解しようとするときには、哲学的精神が必要であり、そこで有効なのはソクラテス的方法だけなのである。ヴァイアーシュトラス(Weierstrass)は、数学におけるソクラテス的方法を論じているが、学校においてそれを使用することを低く評価している。その理由として、ヴァイアーシュトラスは、学校制度にまつわる外的障害と学生の未成熟性とを挙げているが、学校制度の問題はともかく、学生の成熟性をソクラテス的方法を用いずしてどうやって高めることができるというのだろうか。

注

1 *Nelson:Gesammelte Schriften,* Band 1,Felix Meiner; *Die sokratische Methode, Mit einem Vorwort von Gisela Raupach-Strey,* Verlag Weber, Zucht & Co

2 Julius Kraft's Introduction to *Socratic Method And Critical Philosophy: Selected Essays by Leonard Nelson,* Dover Publications, Inc., 1965, p.x　また、ネルゾンはゲッティンゲンで教授資格を得ようとしたが、当時教授であったフッサールの不興をかってなかなか得られないでいたのを、親交のあった数学者ヒルベルトに助けられたと伝えられている。*Constance Reid,Hilbert-Courant,* Springer-Verlag, 1986, p.122　また、ネルゾンに影響を受けた哲学者の一人にポパーがいる。ポパーは初期の著作『認識論の二大根本問題』において、カントとフリースの哲学を認識論の文脈で論じるために長い一章を設け、ネルゾンに言及している。Karl Popper, *Die beiden Grundprobleme der Erkenntnistheorie,* Ⅴ.Kapital

3　現代のソクラティク・ダイアローグとネルゾンの関係については、PPA発行のパンフレット*Das Sokratische Gespraech*を参照せよ。森芳周による翻訳が『臨床哲学のメチエ』Vol..7 2000秋冬合併号所収に収められている。

4　訳文は、藤沢令夫（岩波文庫『メノン』）による。